

# 個人、生活戦略、共同性

齋藤雅哉

## 1 はじめに

本稿は、「個人」に焦点を当てた調査研究法に関する社会的な質的調査論である。これまで、質的調査論では誰しもが同じ方法を用いられる標準化の検討を重ねてきた。この取り組みは、「方法論的な理論」とも言えるかもしれない。ただし、「標準化」が指し示す内容自体の検討はもちろん、調査計画と得られたデータの質との関係など、質的調査を実践する過程で、何度も調査者は自らの調査対象に対する構えを修正する(齋藤2011)。

しかしそうは言っても、日本の社会学のなかでも積み重ねられてきた社会調査論の知見はある。ライフヒストリー法に限っても、中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』(1995)以降、谷富夫編『ライフヒストリーを学ぶ人のために』(1996=2008)、川又俊則『ライフヒストリー研究の基礎』(2002)など、比較的早い段階でまとまった書物が刊行されている。「インタビュー」に焦点をあてたテキストとしては、桜井厚が上梓した『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』(2002)がある。

筆者は初学者の頃、『インタビューの社会学』の副題に「聞き方」とあることから、インタビューに関するマニュアル本と思い、手にしたことを覚えている。ただし読めばインタビュー調査が出来る方法が書かれているわけではなかった。桜井自身も方法論が「方法論」であることで抱え込むあやうさにも言及する。たとえば、「普遍化や一般化との関係」「インタビューによって他者の生や文化理解が出来るのか(方法論的限定性が、他者の生や文化理解の機会を失わせているのではないか)」といったあやうさを、2002年の段階で述べている(桜井2002:11-12)。

他にも、桜井が提示した「対話的構築主義」<sup>(1)</sup> に対して、エスノメソロジーの立場から鶴田幸恵・小宮友根による「インタビューの場」での相互行為分析が不徹底との批判がある(鶴田・小宮2007)。この批判への応答として、「インタビューの場」での立場性だけでなく、作品呈示のあり方や「調査する私」に焦点をあてた議論が積

み重ねられてきた（石川・西倉 2015: 8-12）。しかし、本稿では調査者－被調査者の関係性といった「インタビューの場」に関して積み重ねてきた議論を、正面からは取り上げない。その理由として、筆者が経験した次のようなエピソードがある。

筆者は知的障害、特にダウン症児者家族に関する調査研究を行なっているが、ある研究会での報告後に「あなた（筆者）は男性だから、母親たちの経験を聞き取れていないのでは」と質問を受けたことがある。確かに、障害児者家族とケア、特に母親たちのケア経験などに焦点を当ててきた筆者の研究テーマに関連づけるならば、対象者との間に見た目・身体性・性自認といった素朴なジェンダーの違いがある。また、妊娠・出産の経験がない。このように「インタビューの場」に照準すれば、調査者と被調査者の立場の違いを根拠として、調査の権力性や非対称性、他者理解のあり方を相対化する契機の確保は出来る。

しかし、ジェンダーなど調査者と対象者の属性に違いはあっても、「出来事を中心」は変わらないのではないか。また、議論を「インタビューの場における理解」に留めることは、多くの誤解を生むのではないかとの疑問も抱く。たとえば、桜井は「インタビューの場を超えたより広い社会的コンテクストを考慮にいれなければならない」（桜井 2002: 191）と断りを入れる。この指摘は、語りを「インタビューの場」でのみ検討するのではなく、行政資料や政策の変遷といった社会的コンテクストとの関連づけに注意を促す。また桜井自身は、この作業がなければ調査者への質問が出来ないし、語られたことの解釈も困難であるとも述べる（桜井 2002: 191）。つまり、桜井は「インタビューの場における理解」を主題とした議論に限定しておらず、「インタビューの場」から離れて社会的コンテクストと関連づける解釈過程についての説明が必要と述べているのだ。

以上の点を踏まえて、この小さなノートでは、「インタビューの場」に関する議論として受容・消費されてきたらいいがある質的調査法が、もともと持っていた別の側面に焦点を当て検討する。この検討は、先述の調査者の属性に関するコメントへの応答であり、個人と生活を基点とした社会学的研究の一つの方向性を示すことにもなる。

## 2. 社会調査の推論サイクルと「個」を基点とした調査法

一概にフィールドワークと言っても、「参与観察」「資料収集」「インタビュー」など、さまざまな調査法が含まれる。実際に、フィールドワークの実施にあたって、対象の特徴や関係性と併せて、調査対象ごとに調査研究法を採用する。たとえば、イン

タビュー調査であっても、参与観察や資料収集は必要になる。また、調査対象は当事者団体や行政、個人から自然や動物などを含んだ社会現象・社会的出来事まで射程は広い。この射程の広さに合わせようと、社会学をはじめとした社会科学は調査法を整備してきた（野村2017）。

ただし、質的調査に関する整備は行なわれても、「質的調査と量的調査」など二項対立で捉える議論は日本の社会学でもあった。たとえば、「安田－見田」論争と言われる質的データをめぐるやり取りがある（見田1965, 1970; 安田1970）。安田三郎と見田宗介のやり取りでは、見田の質的データに関する論考に対して、安田三郎は質的データの数量化について言及する。安田の指摘に同意しつつも、見田はあらためて質的データの可能性を模索する<sup>(2)</sup>。

では、安田と見田による〈未完〉の議論を、われわれはどのように引き継ぐことが出来るだろうか。取りあえず本節では、2010年の関西社会学会のシンポジウムの報告者であった三浦耕吉郎と浜田宏の論考と、2人の報告に寄せたコメンテーターのコメントを用いる（浜田2010; 三浦2010; 高瀬2010; 吉川2010）。三浦が長い間に取り組んできたフィールドワークの成果を基に、三浦のフィールドに立ち入ったことのない浜田は「差別の数式」を作成し、モデル化した社会学的知見を提示する（浜田2010）。このように書くと、かつての「安田－見田」論争の繰り返しに見える。ただ、この話には続きがある。三浦は、浜田のアプローチを肯定的に受け取り、フィールドワークの成果に基づいた「モデル」を踏まえた、あらたなフィールドワークをはじめとする。一方で、浜田も演繹と帰納といった方法の対立を、推論サイクルのフェーズの違いとして、両者の接合を図る立場を取る（浜田2010; 三浦2010; 高瀬2010; 吉川2010）。このように異なる調査法を採用しながらも、三浦と浜田は近似的な立場を取る。

このやり取りについて、吉川徹は数理的方法とフィールドワークの方法、それぞれに基づく社会学のあり方を「対抗的相補関係」とし、それぞれが社会学のリアリティ獲得を支えるとする（吉川2010: 72）。確かに、演繹的に理論展開を行なう浜田のアプローチに対して、三浦はフィールドワークに依りながら帰納的に、対象者との対話から導かれる知見を示すアプローチを取る。この違いを対立図式で捉えるのではなく、吉川は社会学的インプリケーションの豊かさで架橋する試みとして、浜田と三浦のやり取りを評価する（吉川2010: 73）。

もう一人のコメンテーターであった高瀬武典は、演繹と演繹以外の知的操作との対話を続ける必要があると述べる（高瀬2010: 69）。高瀬は、演繹自体は社会学的研究にとっ

て依然として重要であり続けるとした上で、「理論から自立した事実」の取り扱い方が演繹による社会学的研究において重要とする（高瀬2010: 71）。高瀬のコメントは、既存の理論枠組みから外れた事実を取り扱わないといった主旨ではない。たとえば、演繹以外の知的操作として、帰納的に展開する研究や対象者とのやり取りを続けながら進める研究もある。他にも多様な社会的現実に対して、記述概念を新しく作成するのではなく、理論の外側の事実と対話を続ける社会学理論研究がある。このような演繹以外の知的操作と演繹との対話が社会学的研究にとって重要であると、高瀬は述べている。

研究法の立場ごとに対話が求められる社会的背景として、谷富夫は「現代社会の異質化や生活世界の多元化のさらなる増大、深化の趨勢があることはまちがいない」とした上で、既存の解釈枠組みでは捉えきれない他者、異文化、異世界の社会的現実を捉える方法の一つとして、ライフヒストリー法に注目が集まったとする（谷1996=2008a: iii）。ただし、「個」を基点としたライフヒストリー法や社会理論だからこその検討課題はある。

たとえば、冒頭で桜井が「あやうさ」の例として挙げていた「個人の一般化のレベル」がある。桜井自身は、文化人類学者C・クラックホーンとH・A・マレーの「どのような人間でも(A) 他のすべての人びとのようである、(B) 他のある人々のようである、(C) 他の誰のようでもない」(Kluckhohn, C. & Muray, H. A., 1953: 53) とする区分を用いながら、(A) を普遍的な一般化、(B) を家族や文化等などの社会制度・社会環境レベルでの一般化、(C) を個人に妥当する一般化と位置づけることで、それぞれのレベルを捉えつつ、何かしら相互の関連性の把握をライフヒストリーの課題とする（桜井1983: 253）。

「個」を基点としたライフヒストリー法の特徴として、「歴史的な時間のなかで変化し進化していく社会関係の複雑な網の目のなかにある独自の実在であることを強調する」（桜井2002: 57）ことになるが、ライフヒストリーと個人的経験、語りの位置づけや経験的研究の理論性など問うべき論点は多々ある。しかし、筆者の準備不足と力不足によって正面から論じる用意はない。以下では、諸課題について若干の整理を試みる。

### 3. ライフヒストリーと個人的経験の語り

谷富夫はライフヒストリーの論集を編むにあたって、生活史を用いない理由を「地域や社会層の人びとが生活のなかで古くから用いてきた衣食住、用具、無形文化など

の歴史という、『地域史』や『社会史』と同義で使われる」研究領域があることから、混同を避けるためだとする（谷 1996=2008b: 6）。続けて、谷は宮本常一は『忘れられた日本人』（1960=1984）で、民俗事象が人びとの生活や社会に持っている意義や影響を記録した生活誌を「村の生活誌」「個人の生活誌」と描いたとし、宮本が個人のライフヒストリーを生活誌の一形態と位置づけていた点に注意を促す（谷 1996=2008b: 6-7）。

ここでは谷の指摘を踏まえて、ライフヒストリーの利用には諸形態があることを確認しておく。社会学領域では、たとえば古川彰『村の生活環境史』（2004）や武田俊輔『コモンズとしての都市祭礼』（2019）など、生活環境や地域社会との接点がある。また、個別領域でのライフヒストリー研究の蓄積として、家族研究では野沢慎司のネットワーク論にライフヒストリーを取り込んだ知見がある（野沢 2009）。

ライフヒストリー研究について、有末賢は「1. 事例の類型化」「2. 質的調査法と「個人」研究（社会調査論）」「3. 主観的現実の変更過程（現象学的社会学）」「4. 生活史と社会史（社会変動論）」と、おおまかに4つの視角に分類する（有末 2012: 57）。その上で、有末は「人間の生涯に即した形やその人自身の重要な意味を持つ事件や体験から、社会の歴史を再構成していきこうという考え方である」（有末 2012: 57）と続ける。

また、有末は「英語のライフヒストリー（life history）には、個人の生活、生命、一生といった意味合いが強く、この意味では個人生活史（パーソナルライフヒストリー）を指しているとも言える。こうした観点は、現象学的社会学者のバーガー夫妻が『バイオグラフィカル・アプローチ』と名付けた個人の生活史に即した日常生活世界の視角（パースペクティブ）ともつながっている」（有末 2012: 69）とする。

ライフヒストリー研究は、どの対象・領域であれ、「個人」の視点に着目した研究方法と言える。そして対象に近づくために、バイオグラフィカル・アプローチと有末が示す「社会の歴史を再構成する」アプローチがある。両者のアプローチ自体は、先述の有末の4分類と同様に、ライフヒストリー法の射程と捉えることが出来るだろう。この4分類と2つのアプローチは、基本的には「個人的経験」に価値を与え、「これまでの人生を語ってもらえませんか」「体験した〇〇の出来事について、ご自身の経験をお聞かせください」などの依頼をして行なうインタビュー調査や日記等の生活記録を資料群に展開してきた。

もちろん、2つのアプローチの間で、立場の違いから一方のアプローチへの批判はある。たとえば、江頭説子は「語られた内容が、たとえ歴史的な事実と異なっても、

それをその時代を生きた語り手／主体の歴史的多元性としてそのまま受け入れるのではなく、歴史的事実とは異なることをあきらかにしたうえで、『なぜ語り手／主体が歴史的事実と異なる事実を語るようになったのか』というプロセスに目を向けるべきである」(江頭2007:28)と批判する。

江頭の批判に対して、「個人的経験」に照準するバイオグラフィカル・アプローチの立場から応答しておく。まず、江頭が批判する「歴史的事実」からのズレをそのまま受け入れるわけではない。あくまで「歴史的事実」とのズレは、主観的現実を読み解ききっかけである。つまり、歴史的事実と個人的経験の結びつきが一貫したものであるのではないことで生じる「ズレ」に着目することで、主観的現実を捉えることを意図したアプローチである。

ただし、桜井は語られた物語の内容を「いま・ここ」での構築物として受け取られる可能性を危惧する(桜井2011:245)。そのために、「実際のインタビューにおける『経験的語り』では、人びとは過去の『事実』について物語世界を通して語っていると信じているのであり、そのかけがえのない体験は、実際におきた歴史的な出来事についてのそれなのである」(桜井2011:245)として、「あのとき・あそこ」の出来事を位置づける。

「インタビューの場での理解」が主題となるとき、「いま・ここ」の語りによる再構成が議論の主題となりがちであるが、同時に桜井は「あのとき・あそこ」の出来事のリアリティを保持する。語り手の語りを実際に起きた(個人的)歴史的な出来事と捉える。その上で、「歴史的事実」からのズレを間違いと理解せず、語り手がどのように個人的経験として取りまとめるかを明らかにすることが、ライフヒストリー法、特にバイオグラフィカル・アプローチの特徴の一つである。次節では、語りをどのように個人的経験として捉えるかについて検討する。

#### 4. 語りの様式と個人的経験

先行研究では「インタビューの場」に照準を合わせた検討が少なくなかった。それに対して、関水徹平はA・シュッツの議論を援用しながら、対象者の「経験」の二次的構成を取り上げる知的営為として理論的検討を行ない、ライフストーリー研究は「主観的領域」(Plummer 2001)に着目した研究領域であるとする(関水2019)。

『口述の生活史』(1977=1995)で松代のばあさんの語りを聞き取った中野卓は、「デンジンが、ライフヒストリーがライフストーリーであるがゆえにフィクションだとし

ているが、私は語られた現実と語られた虚構とを区別する」(中野 1995: 191-192)として、フィクションを歴史と呼ぶことは出来ないとする。その上で中野は、自身の基本的発想を「本人が自己の現実の人生を想起し述べているライフストーリーに、本人の内面からみた現実の主體的把握を重視しつつ、研究者が近現代の社会史と照合し位置付け、註記を添え、ライフヒストリーに仕上げる」(中野 1995: 192)として、「歴史的事実」と主観的現実の変容を関連づける自らの方法論的立場を示す。このとき、語り手も研究者も現在の視点に立って語られるが、そのことでフィクション(虚構)と見なすのは誤りであるとする(中野 1995: 192)。

一方で、中野から批判されたデンジン自身も「フィクションは現実の出来事と想像上の出来事の両者から創りあげられたものである」(Denzin 1989: 41)と述べている。また桜井も、中野の「フィクション(虚構)」という認識に対しては、「フィクションといっても語り手にとって現実ではないとか、語り手が故意に歪曲しているとかをいうのではない」(桜井 2002: 194)と応答する。ここで問題になるのが、「フィクション(虚構)」の取り扱いである。中野とデンジンや桜井との間に共通する論点としては、語られた内容の変容性からフィクションの問題として取り扱うのではなく、「語り手にとって現実の出来事を中心は変わらない」「語り手にとって現実の出来事を中心と関わる部分の変容性はある」といった共通認識を、研究対象や立場性を超えて関係づけることが重要な論点となる。

この論点への対応として、桜井が導入したのが〈物語世界〉と〈ストーリー領域〉である。前者は出来事が筋になって構成されており、後者はメタ・コミュニケーションの次元での語りであるとする(桜井 2002: 126)。この異なる位相の相互関係を捉えることで、上記の論点に対応する(桜井 2002: 126-127)。たとえば、歴史的事実と個人的経験がズレることは「間違い」でない。なぜなら、「歴史的事実」と一貫していない個人的経験の語りをフィクションと切り捨てるのではなく、〈物語世界〉で語られた出来事を中心を確認は出来る<sup>③</sup>。また前項で述べたように、「歴史的事実」から部分的にズレた点については、対象者の主観的現実の変容過程を捉えるアプローチによる対応も可能である。

つまり、個人的経験を聞き取るなかで、複数回のインタビュー、文字資料や他の人へのインタビューなどを行ない、語りのバイアスを取り除くことが出来る個人的現実の内容と、あくまで〈物語世界〉に留まる「自伝事実」とがある(桜井 2002: 203)。また、「語り」から社会的コンテクストを取り出すために、以下の図1のように、ポリテッリ

の図式（1991=2016）と桜井が示した語りの様式を対応させたものがある（桜井 2012: 105）。

出来事の種類・配列のパターン	多様な意味や経験の領域	空間概念	語りの様式
制度的モード	政治、統治、組合、イデオロギー、国民的・国際的な歴史的文脈など	国民国家と世界	マスター・ナラティブ
集合的モード	コミュニティ、近隣、職場生活、儀礼、自然災害、[制度的]エピソードへの集合的参加など	街、近隣、職場	モデル・ストーリー
パーソナルモード	家族生活、子どもなど	家庭	パーソナル・ストーリー
	私的、結婚、就職、他の二つのレベルへの個人的関与など	個人	

図1 語りの様式（桜井 2012: 105）

桜井やポリテッリが分類した語りの様式は、インタビューの過程で一つの様式やモードに留まったとしても、それ以外の様式やモードと排他的関係でなく、完全な一致を前提にもしない。また、この図式内での「事実」の取り扱いについては、ポリテッリの三つのモードのように、社会的文脈の多様性に応じて多様な表象となる（桜井 2011: 244）。その上で、「個人的経験を物語る」ことについて、桜井は次のように整理する。

個人のライフストーリーは、その個人の独特なパーソナル・ストーリーと、コミュニティに流通する慣習的用語法、なかなしく卓越した用語法としてのモデルストーリー、そしてより広い社会のマスター・ナラティブが重層的に語られるのである。したがって、ライフストーリーを語ることは、自己をコミュニティや全体社会の出来事の時間的配列のなかに位置づけることであるという意味で、人びとが過去を歴史化しようとする試み（桜井 2012: 104）

ライフストーリーの生成に関わる「インタビューの場」での語られ方への着目は、「インタビューの場」に閉じられた話ではなく、また「物語る」ことの変性を「真偽」の問題と直接的に結びつけたり、位相の異なる語りを退けるのでもない。あくまで、異なる位相が重層的に語られる「個人的経験」を取りまとめる際に、有意義な視点となる。次節では、語りを用いた個人と生活を基点とした社会学的研究の方向性を模索する。

## 5. 個人と生活を基点とした社会学的研究の方向性について

日本の社会学でナラティブアプローチを牽引し続けてきた野口裕二は、ナラティブ・



セラピーの課題として、1) 個人モデルや病理モデルを批判しながらも、その残像を引きづっているのではないか。2) ネットワークや共同性と関連づけられていないのではないか、といった点を挙げる(野口 2018: 215)。本稿では、野口の議論を確認した上で、個人と生活を基点とした社会学的研究の方向性を模索する。

野口自身が積極的に紹介してきた K・E・ガーゲン<sup>3)</sup>は、ナラティブ・セラピーの課題を 1) ナラティブ・セラピーは個人主義的であり、2) 単一の物語の獲得は別の環境では不十分ではないか、3) 物語の一体化は周囲の人びとの関係性を限定するのではないかと整理する。それに対して、野口はガーゲンの整理を「個人主義の徹底」であり、徹底した相対主義・多元主義を求めるものだと批判する(野口 2018: 216-218)。さらに野口は、ガーゲンが想定する自己像には、不断の変化を求める「再帰性」の原理が見出せるとし、「環境の変化を自力で乗り切っていく強い個人のモデルだけが示されている」とガーゲンの議論を批判する(野口 2018: 221-224)。

野口はナラティブ・セラピーについて、これまで関係性を個人の変化を促す手段として位置づけてきたが、目標と考えることで個人主義的傾向から脱し、個人と関係性の循環を獲得するのではないかと整理する(野口 2018: 226)。具体例として、野口は「オープンダイアログ」を取り上げる。オープンダイアログで目指されるのは、人びとの多様な声が尊重され響き合う関係性として、患者を中心に家族や関係者によって構成される生活の場に根差した持続的な関係性としての共同性の獲得にある(野口 2018: 227)。つまり、個人の適応能力を促すナラティブや対抗するナラティブによって解決する問題<sup>4)</sup>はあるが、長期的には個人の対応力だけでなく、個別のナラティブを持ち寄って、相互に理解し合うことで生まれる共同性の獲得も目標となる(野口 2018: 228)。

上述の野口の議論を補助線に、個人と生活を基点とした社会学的研究の方向性を模索する。まず、中野卓や桜井厚に影響を与えた有賀喜左衛門は、生活を経済や労働、政治、信仰といった社会諸領域ごとに生成される社会関係もしくは価値規範の束と捉えた上で、これらをまとめる相対的に自立した世界として生活世界を位置づけていた。たとえば、生活は外部(国家権力等々)の影響を受ける。具体的には、地域社会や集落、コミュニティごとに社会的条件、文化的条件によって規定する生活を想定しながら、人びとは規定された生活(条件)を組み替える。もう1つ有賀の生活を捉える特徴として、人びとの関係性に焦点をあて、集団を対項に置くことで、社会関係を構造的にみる方法論を採用していた点がある(鳥越 1982)。有賀の生活を捉える視点は、中野

の以下の指摘にもみられる。

歴史的、社会的な大小の状況が通時的に変転しつつ連鎖してきたそのなかで人は成長し、その人なりの主体性を作り上げてきたのです。それゆえ人は自分の置かれた環境とその変化を自分の直面する状況として自分なりに受け留め、多少ともその状況を新たな状況へと変えてきたのです。(中野 1981=2003: 34)

中野は個人と社会の相互連関を有賀の議論を受けて整理する。桜井もまた中野と同様に個的存在に着目するが、「個人と社会」の間に中間項を入れた三層図式を用意する。この点は、中野よりも有賀が設定した生活把握の仕方に近い。前項の図1で確認したように、桜井は「個的存在」と「全体社会」との間に、「地域社会」を挟むことで、「個人」に着目しながらも集団や地域社会と関連づけ、生活を捉える枠組みを作り上げる。その上で、3節、4節で確認した「個人的経験」の語りを用いた経験的研究に取り組んできた(たとえば、桜井2005)。

桜井が行ってきた経験的研究の特徴として、個人的経験を取りまとめるなかで「個的主体」や「生活世界」に着目する際に、全体社会ならびに地域社会との関係を「反作用」や「妥協」や「接合」と関連づけ、個人の生活経験として扱う生活の論理を明らかにしてきた点がある。このように、桜井は前節で確認した「位相の異なる語りを個人的経験として取りまとめる」方法論を確立した(桜井1983,2002,2012)。

本稿では、このときの生活の論理を、全体社会や地域社会から相対的自律性を持った生活を形づくる「生活戦略」と位置づける。ただし、生活戦略は個人の自己決定で貫徹するわけでない。たとえば、暮らす地域が全体社会の差別意識を積極的に受容したとき、同じ地域で暮らす人びと同士でも、葛藤や衝突は生まれ得る。

上述の状況を生み出す構造の下での社会的条件や制約の中で、個人の生活戦略が取られることを確認しておく。その上で、1) 個人の生活戦略を記述すること、2) それぞれの生活戦略が部分的・一時的でも重なり合うことで、生活の場に根づいた持続的な関係性としての共同性の獲得は可能か、といったトピックを個人と生活を基点とした社会学的研究の課題に設定する。

## 6. おわりに

本稿は「インタビューの場」を対象とした方法論として受容・消費されてきたきらいがある質的調査法について、「個人と生活」の点から検討を加えてきた。語り手が聞き手によって語り方を変えても、そして出来事から時間が経つことで記憶の混同や忘却によって変容しても、「出来事を中心」の全てが変わるわけではない。だからこそ、「語り」の物語性や語り手－聞き手の関係性など、「インタビューの場」で取り上げられていたトピックの可変性から「事実性の否定」と理解を進めるのではなく、語り手の個人的経験を聞き取る原則を変える必要もない。端的に言えば、「インタビューの場」での語り方への着目だけでなく、〈あのとき－あそこ〉で起こった出来事について語る〈物語世界〉に焦点をあて解釈することで、「社会的現実」を描き出す。以上のように本稿では、「インタビューの場」に関する議論と受け取られがちであった質的調査法が持っていた別の側面として、「語り」を語り手の個人的経験として適切な文脈に置くためのアプローチであったことを指摘した。

また本稿は、個人と生活を基点とした社会学的研究の一つとして、研究課題を展開するための方法論的検討という側面もあった。筆者の研究課題に関する先行研究の動向では、障害児者家族の生活問題として母親たちのケア経験の苦難を描くことで、ケアの社会化に取り組んできた。ただし、生活者としての母親たちの論理をどのように記述するかについては、必ずしも十分な蓄積が積み重ねられてきたわけではない（齋藤 2020）。

上記の課題を「個人と生活」の位相で捉えるために、本稿の議論を踏まえて、研究課題を次のように展開する。母親たちの「生活世界」「生活実践」に照準し、さまざまな条件下で生活を形づくる人びとの生活戦略としてケア経験を捉える。その上で、それぞれの生き方を模索し合う共同性、「生活共同性」の生成過程を明らかにする。このときの共同性は、共同性や共同体に対して指摘されてきた「幻想」「抑圧性」を組み替える実践として、個人的経験から「生活戦略」を描くことで、個々人が生き方を試し合う共同性として構想する。

以上の整理を踏まえて、冒頭で紹介したエピソードに応答する。対象者と調査者との違いによって得られた「質的データ」の相対化の契機は必要だとしても、語り手の人生の一部だとしても、語られた経験が語り手にとって経験した（個人的）歴史的な出来事であることに照準した議論を展開する。本稿の検討を経て、調査対象者から得

られる「質的データ」へのアプローチをこのように位置づける。

本稿の作業を踏まえて、今後の課題を示す。まず研究課題として、桜井が押し進めた「個人的経験」から生活のありようを捉える試みを、上述の整理のように個々人の「生活戦略」による異同を内包した共同性に照準した社会学的研究として引継ぐ。その上で、試行錯誤の出来る関係性、「生き方を試し合う共同性」を構想するために、母親たちの「生活戦略」と「社会関係の構造」を射程に収める社会学的方法論を鍛え上げる。

## 注

- 1) 本稿では「対話的構築主義」に関する検討は行なわない。
- 2) ただし、安田が亡くなったことで2人の議論は展開されなかった。
- 3) この点に照準をあわせることで、「社会的現実」を描くアプローチが取り得る。
- 4) 野口も、ガーゲンの示す方向性に理解は示す。ただし、それだけでは十分でないとする立場を取る。

## 参考文献

- Alessandro Portelli, 1991, *The Death of Luigi Trastulli and Other Stories: Form and Meaning in Oral History*, State University of New York Press (= 2016, 朴沙羅訳『オーラルヒストリーとは何か』水声社.)
- 有末賢, 2012, 『生活史宣言——ライフヒストリーの社会学』慶応大学出版会.
- Denzin, Norman K., 1989, *Interpretive Biography*, Sage Publication.
- 江頭節子, 2007, 「社会学とオーラル・ヒストリー——ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に」『大原社会問題研究所雑誌』585, 11-32.
- 古川彰, 2004, 『村の生活環境史』世界思想社.
- 浜田宏, 2010, 「差別をめぐる相互行為のダイナミクス——演繹的研究のコアとしての数理モデル」『フォーラム現代社会学』9, 42-51.
- 石川良子・西倉美季, 2015, 「ライフストーリー研究に何が出来るか」桜井厚・石川良子編『ライフストーリー研究に何が出来るか——対話的構築主義の批判的継承』新曜社, 1-12.
- 川又俊則, 2002, 『ライフヒストリー研究の基礎』創風社.
- 吉川徹, 2010, 「コメント (2)」『フォーラム現代社会学』9, 72-74.
- Kluckhohn, C. & Muray, H. A., 1953 "A personality formation" in Kluckhohn, C., Muray, H.A., & Schneider, D. (eds.), *Personality in Nature, Society and Culture*, New York: Alfred A. Knof, 53-69.
- 見田宗介, 1965, 「『質的』なデータ分析の方法論的な諸問題」『社会学評論』15(4), 79-91.
- , 1970, 「付記」『社会学評論』21(1), 85.
- 三浦耕吉郎, 2010, 「理論の外へ、もしくは <対話> としての社会学」『フォーラム

現代社会学』9, 60-68.

宮本常一, 1960=1984, 『忘れられた日本人』岩波文庫.

中野卓, 1981, 「個人の社会的調査研究について」『社会学評論』32(2) (= 2003 『生活史の研究』, 23-45.)

———, 1995, 「歴史的現実の再構成——個人史と社会史」中野・桜井編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂, 191-218.

———編, 1977=1995, 『口述の生活史』御茶ノ水書房.

———・桜井厚編, 1995, 『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.

野口裕二, 2018, 『ナラティブと共同性』青土社.

野村康, 2017, 『社会科学の考え方—認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会.

野沢慎司, 2009, 「生活史とネットワーク—時代と磁場と自我のジレンマ」『ネットワーク論に何ができるか——「家族・コミュニティ問題」を解く』勁草書, 139-161.

齋藤雅哉, 2011, 「たち止まること——「個人」への社会的フィールドワークについて」『応用社会学研究』(53), 199-211.

———, 2020, 「生活と親業」『社会学研究科年報』27, 33-39.

桜井厚, 1983, 「生活史の研究課題」Thomas and Znaniecki, 1918=1927 (= 1983, 『生活史の社会学』御茶ノ水書房, 245-265.)

———, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

———, 2005, 『境界文化のライフストーリー』せりか書房.

———, 2011, 「『事実』から『対話』へ——オーラル・ヒストリーの現在」思想(1036), 235-254.

———, 2012, 『ライフストーリー論』弘文堂.

佐藤健二, 1995, 「ライフヒストリー研究の位相」中野・桜井編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂, 13-41.

関水徹平, 2019, 「ライフストーリー研究と複数の事実性——学知と日常知を問い直す方法論としての可能性」栗原巨・関水徹平・大黒屋貴稔編『知の社会学』学文社, 287-306.

高瀬武典, 2010, 「コメント(1)」『フォーラム現代社会学』9, 69-71.

武田俊輔, 2019, 『コモンズとしての都市祭礼：長浜曳山祭の都市社会学』新曜社.

谷富夫編, 1996=2008, 『新版 ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社.

———, 1996=2008a, 「はしがき」『新版 ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社, i - vi.

———, 1996=2008b, 「ライフヒストリーと何か」『新版 ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社, 3-19.

鳥越皓之, 1982, 『トカラ列島社会の研究——年齢階梯制と土地制度』お茶の水書房.

鶴田幸恵・小宮友根, 2007, 「人びとの人生を記述する——『相互行為としてのインタビュー』について」『ソシオロジ』52(1), 21-36.

W. I. Thomas and Florian Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America, First*

*Published, Boston: Richard Badger, 1918, 5 vols.* republished, New York: Alfred A. Knof, Inc, 1927, 2 vols. (= 1983, 桜井厚訳, 『生活史の社会学：ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房. (妙訳))

安田三郎, 1970, 「質的データの分析と数量的分析——見田論文へのコメント」『社会学評論』21(1), 78-85.

(さいとう まさや・大谷大学)